

## オオクニヌシ神話

このシアターは、国造りと縁結び（人と人の絆）の神で、オオクニヌシノカミの生涯から、いくつかのエピソードを紹介します。縁結びの概念は、夫婦や隣人、同僚との関係だけでなく、農家の収穫の成功など、人々の日常生活における良い結果も含んでいます。オオクニヌシは、出雲大社の主祭神です。

古事記（712年）には、若いころにオオナムチと呼ばれていたオクニヌシが登場する、最初の物語が記されています。シアターは、ヤカミヒメという名の乙女と結婚しようと、オオナムチが大勢の兄とともに因幡（現在の鳥取県東部）に旅するところから始まります。その道中で、皮を剥がされて苦しんでいるウサギを見かけました。オオナムチは兄弟の中でただ一人立ち止まり、ウサギに傷の治し方を教えました。この優しさは、兄たちの申し出を拒否するヤカミヒメの心をつかみました。ヤカミヒメの拒絶に腹を立てたオオナムチの兄たちは、オオナムチを殺そうと企み、真っ赤な巨石でオオナムチを砕き、焼いて灰にすることに成功しましたが、2人の癒しの女神が天から降りてきて、魔法の薬を塗ってオオナムチを生き返らせました。その後、オオナムチは紀国（現在の和歌山県）に逃げ込み、そこから根の国に向かい、彼の祖先であるスサノヲに助けを求めました。

その途中、オオナムチはスサノヲの娘・スセリヒメと出会い、二人はすぐに恋に落ちました。しかし、スサノヲはオオナムチを助けようとはせず、4つの苦しい試練を課します。スセリヒメの助けを借りて、オオナムチはそれら全てを成し遂げました。そして、スサノヲが眠りについたとき、オオナムチはスセリヒメと駆け落ちしました。スサノヲは目を覚ましますが、二人に追いつくことができず、二人を祝福します。去っていく二人の背中に向かって大声で叫び、オオナムチにオオクニヌシの名を与えて、しっかりと治めるようにと言いました。

出雲に戻ったオオクニヌシは、兄たちを服従させて国づくりに努めました。太陽の女神、アマテラスオオミカミは地上界の様子を見て、オオクニヌシに子孫への支配権を譲るように説得する使者を次々と送ります。オオクニヌシは子の神と相談したうえで、自分の名誉のために立派な社殿を建てることを条件に承諾しました。これが出雲大社の起源だと言われています。